

ルーピンの咲く谷

中 嶋 嶺 雄

少年時代から中年の今日まで、少なくとも年
に二、三回は山に登りつづけている私にとって
は、花というかどうかしても北アルプスの高山植
物ということになってしまふ。とはいえ、若き
日に、その山を限りに別れることとなった女性
と涸沢から奥穂に登り、お互いに心理的にも疲
勞してザイテングラードを下りきったところで
岩の隙間に生まれて初めて見つけた一輪の可憐
なヒメイチゲの白い花弁も、今となっては想
いの彼方に淡くかすんでしまっている。

それよりも、もっと明るくて、壮大で、ウォ
ルト・ディズニーの映画の一齣のような花の想
い出を探すことはできないものか。

あれは一九七七年十二月のことだから、もう
十五年も以前のことになるが、ニュージール
ランドのマウント・クックへ行ったときの心象風景
は、それに近いもののように思われる。クライ
ストチャーチからレンタ・カーでレイク・タケ
ボの湖畔に一泊し、翌日はなんとも長閑で牧歌
的な山あいの小さな湖アレクサンドリアで涼し
い夏の昼下がりを通して、いよいよヤザン・ア
ルプスに向かった。山道に入ったあたりから、
谷間一杯のエニシダの黄とその強い芳香に圧倒
されたのだが、路傍には紫、ピンク、黄、白の、
ちやうど藤の花を逆さに立てたような形の花が
目立つようになってきた。



花のエッセイ



■プロフィール

なかじま みねお

1936年生まれ、東京大学大学院卒。現在東京外国語大学教授、兼同大学海外事情研究所長。評論集「北京烈烈」(筑摩書房)よりサントリー学芸賞受賞。著書「中国の悲劇」、「リヴオフのオペラ座」等多数。

こんなに鮮やかで清らかな花に巡り合わせたことはなかったのだ、何とか名前を知ろうと二、三の人に尋ねると、それはルーピン (Lupin) だという。淡い紫も濃いピンクも純白もクリム色も、ときには同色の群落になったり、色とりどりに混じり合ったりして咲いている。

やがて巨大な氷河の谷をまたいで、いかにもこの地にふさわしい、その名もハーミテージ (隠れ家) という山荘にたどりつき、私たち家族は谷間の散策に出かけた。上高地の梓川がもつとも巾広くなっている地帯の何倍かのスケールの谷は、一面にルーピンの花に蔽われ、夕日に輝いて、まるで虹の帯のようであった。

この花が最近では日本でも栽培されているヨーロッパ原産のマメ科の多年草ルピナス (Lupinus 和名・登藤) であることはのちに判ったのだが、しかし、マウント・クック山麓のルーピンは、断然違っていて、もつと野草の趣があり、色ももつと鮮やかであった。

私は、ニュージーランドのこんな山奥のルーピンが在来種ではなく、実は白人の移住とともにイギリスから入植されたものであることを知って、いささか落胆したけれど、花には国境がないことを認識せざるを得なかった。

だから、郷里の松本に発した花いっぱい運動も、同様に全世界に拡がってゆくに違いない。